Osaka University Knowledge Archive

Title	海外で体験した阪神大震災
Author(s)	大西, 好宣
Citation	震災体験記. 2002, 8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3492
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

海外で体験した阪神大震災 大西好宣（40 歳　団体職員　神奈川県横浜市）

その日の朝、僕は仕事でタイのバンコクにいた。次の目的地であるカンボジアに向かうため早起きした僕は、テレビも見ず、いつものようにホテルをチェックアウトし、空港のラウンジでくつろいでいた。日本で起こっている大惨事など知る由もなかった。
　ビジネスマン風の二人組の日本人男性が声高に話しながらラウンジに入ってきた。「……関西で…地震が…」「…うん…大きい…情報が…ない」　途切れ途切れの会話を耳にはしたが、その場では全く気に止めなかった。

　プノンペンはバンコクよりさらに情報が届きにくい。仕事中もまたその前後も震災の話は一切現地の誰からも出なかった。仕事で会ったどの人とも笑顔で別れた。

　プノンペンで初めてそれらしき報道に触れたのは、仕事を終えてホテルに戻った午後 5 時半。ロビーのテレビの前に人だかりがしていた。日本人のおばさんたち（ボランティア団体の人だろう）が右往左往して何やら騒いでいる。しかしこの時、僕は余りにも疲れていた。一刻も早く部屋に戻りたかった。僕は皆が大声でまくしたてているのを尻目に、テレビの横を逃げるように通り抜けた。

　僕が地震のニュースを見たのは、それから 2 時間後。ホテルのジムの中だった。夕食後にちょっと運動でもしようと、マシンで軽いジョギングをしていた時のことだ。ＣＮＮテレビだっただろうか。マシンの前にあるテレビ画面に、いきなり地震の光景が映し出された。倒壊したビル群。ぐにゃぐにゃに曲がった高速道路。燃え上がる街。あちこちで響き渡るサイレンとヘリコプターの音。どれもこれもが信じられない光景だ。
　「はて、どこの国だろう」。すると画面の右上に見慣れた日本語で「〇〇放送」の文字が。「ほう、日本のテレビ局か。うん？」
　次の瞬間、僕の目は凍り付いた。画面の中央下に、「神戸市」の文字が。反射的にマシンの緊急ストップボタンを押す。「ばかな！」

　どの位その場に立ち尽くしていただろうか。ふと正気に返った僕は猛然と部屋にダッシュ。ドアを開けるなり、襲いかかるように電話の受話器を取った。姫路の実家は大丈夫だろうか。いや、どうか無事でいますように。必死の思いで、ナンバーボタンを押し続ける。3 回、4 回…10 回、11 回……。だめだ。
　何度繰り返しても繋がらない。仕方なく受話器を置く。「よし、冷静に考えよう。緊急事態だから、回線がパンクしているに違いない。いや、ひょっとすると電話の中継局すら甚大な被害を受けているのかも。とすれば、直接姫路に電話してもだめだ。東京の勤務先が助けてくれないか？　いや、東京とプノンペンとの時差は 2 時間。とっくに営業時間は終

わっている」。
　僕は、名古屋に住む弟に電話をかけることにした。何か情報を持っているかもしれないと思ったのだ。5 回以上かけても繋がらない。うーん、ここもだめか。

　そこでハタと気付いた。そうか、このように海外が注視する大緊急時には、国際回線そのものが満杯になってしまっているのだと。これはもう、回線に空きが出るまでひたすら待つしかないと腹をくくった。
　その後約 1 時間おきに電話をかけ続け、やっと名古屋の弟と連絡が取れたのが日本時間の深夜。間延びした声が聞こえた。彼によれば姫路は震度 4 で、かなり揺れたらしいが神戸よりは随分ましで、両親も無事だとのこと。これでまずは一安心。一方で、犠牲になった神戸の人たちに思いを馳せる。

　実はこの時、営業時間外だった勤務先の総務課長は、ねばり強く僕の実家に電話をかけ続け、両親の無事を確認する努力をしていてくれたことを後で知った。